法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-08-03

<書評>西尾実著『信州教育と共に』

太田，正夫

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
65
(終了ページ / End Page)
67
(発行年 / Year)
1965-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019124

〈書評〉

西尾　実著『信州教育と共に』

太田正夫

由来我が教育者間には消極的・受身的・屏息的努力のみをもって真面目なりとするの風潮がある。この考えの人人は、実際教育者はただ与えられた材料を示された方針によって教授してゆけばそれでよい。与えられた教科書に対しては理解するの要こそあれ、これを批評する如きは僭越であるというている。これが果たして真に真面目な教育者の採るべき途であるであろうか。(中略)すでに定められた教科目があり与えられた教科書があるのであるから、ただこれを後生大事に運用すれば充分であるという位に心得ていてはならぬ。すなわち自己の考察を普通教育の根本堂奥に立ち到らしめて、そこから必然的に教育精神および教授材料などを見いだしきたり、もって自己の教育理想を確立し、これに照らして現行の制度および教科書を理解しつつ批評しつつ、みずからのいくべき途を見いださねばならぬ。かくの如き根本的努力を忘れて真面目をいい研究をいうも、ただ末技に終わらんのみである。教育の進歩はかくして初めて望む事ができるのである。

以上は、大正五年に執筆された「国語読本について」と題したものの抜書きである。――本書は大正二年(二四才)から大正十五年(三六才)に至る十年間、主として雑誌「信濃教育」に寄せられた諸篇を集めたものである――この書に集められた論は、時論風のものが多いが、冒頭引用したものは、約五十年たった今日もなお生きている。もちろんそのような箇所は随処にあるが。ほんとうは現在の教師にはあてはまらない筈なのだが。ここに批判されているような教師は現在表向きにはことあげされて望まれてはいないが、諸種の文教政策はこのような教師を作りあげつつある。

「三人の教育者」と題した実際のモデルのもとに大正七年に書かれた教師論も、現在生きている。すなわち、第一は、何事にも法規と教科書を中心として、忠実にそれらの精神を実現しようとしている教育者。第二は、何事にも偽らない自己を中心とし、かつ日常の言行をして自己の真実心と一致せしめるものをもって、誠実な教育の道であると考えているもの。第三は、徹頭徹尾児童各自の個性境遇を中心として出発点としているもの。という三つのタイプがあげられている。第一の者が、「その教育がうまくいかなければ、悪いのは児童だということにすぐ定まる。そこでさらに厳格な外形の整頓や、複雑な方法やらを造っていく云々」とあるなど、以下第二第三は詳述は避けるが、三者とも今隣人に見る思いがする。そして、第二に「蔽うべからざる真理」を否みがたいとし、第三を「真の誠実」として上げている。

以上の教師論を読んで思うことは、最初の受身的教師と「第一の」教師とについては否定されるべきものとしてあげられているのだが、そのような教師が、なぜまじめであると肯定されてきたかということに対する根本的な問いかけはない。それは、教育精神・教育材料を見出すのに普通教育の根本堂奥に考察を到らしめれば果たされるというもののみ方につながるのではないか。第二、第三の教師論が、その発想を教師の自己や生徒の自、

個、においていることへもそれはつながってゆくだろう。明治四十五年、長野師範の「学友」に寄せた「天才教育」という小論の最初に「真によく了解すれば児童は各自一箇の天才として生まれたあるものあるを知る」ということばにも伺われるように、その思想の根底に、すでに指摘されている、白樺派的人間肯定の精神を見出すことが出来るのではあるまいか。それは、良寛をいい、道元をいい、ペスタロッチをいい、新川橋のこじき哲学者をいい、惠心僧都をいうときも、そこに全人的に肯定し、傾倒してゆく宗教的な浪漫主義（理想主義でなく）をさえ私は感ずる。時代の風潮があるにしても、「根本堂奥」とか、あるいは芭蕉をいうにしても『造化に従ひて造化にかへれ』という如き自然の堂奥に参入した聖世界そのものであったのである。」（「三つの世界」大正二年）というようなことばにもそれは伺えるのである。そこには白樺派的精神としてあったであろう強い個我をも没我にかえてしまった宗教的な精神への傾倒が見られる。そしてそれは先程あげた一つ一つの人格への全面的肯定と傾倒というより深い白樺派精神においてなされているといえるのではないだろうか。

それらの精神は世阿弥との出遇いによってさらに教育観として定着し、自信深いものになってゆく。そこにはわたしたちの聴くべき多くのものが語られている。「愚かなる眼にも、実にもと思ふやうに能をせんこと、これ寿福なり」より、小学校一年生の前に「考えること」から「見ること」への一躍を説き、「覚習条々」からは「教授法を忘れて教育を見よ。教育を忘れて人を見よ。人を忘れて心を見よ。心を忘れて教育を知れ。」という大道を発見している。

さらにそれらが方法論としては、後年示される方法論への萠芽が随処に示されることで進められている。最近、関係認識などという不熟語でこと新しく形象の読み方が述べられたりしているが、すでに大正三年「創作の心理と綴り方」で、全体形象に従って、その一部分があり、その一完体を能動的にとらえることが真の想像作用であることの指摘が行われている。「徒然草について」（大正十二年）では、詩型問題にふれて、内的感動の動きそのものとして「言語的表現に専念集中している際の作用とその結晶」を「想像」の語で呼んでいる。不勉強の私は、これが後年どのように発展したか審らかにしていないのを残念に思っている。そして教育において「いかなる材料を」選ぶかは、「いかなる中心に統一して教うべきか、自己の理想として明らめた上にかからねばならぬ事」（「国語読本について」）を説いている。

読み方については、成心を去って純一無雑の気持で読むことを説かれているが、そこに述べられているような評釈・解説などに影響されるような、また恣意的になどの次元の読み方はとらないにしても、著者が「一脈の中心点に統一された時」「これまでのままでは何の役にもたつまじく思われる諸材料が、それぞれ有機的関係を生じて、活き働くように思われて来た。（論語を）読むのは学習ではなくなった。修養的努力でもなくなってしまった。例えば飢え渇いた一つの心が、命の糧を求めて育ちゆく営みに外ならなくなってきた。もちろん注釈書の必要がなくなってしまった。直截明瞭で心に冥会を覚えしめ、何らかの感動を惹き起こされる箇所のみに心を集中した。（中略）読書における理解の端緒、冥会の中心点というものは、かくしてのみ得られるものだと信ずるようになった。」（「回顧と反省」大正六年）（かっこ内は筆者）といっていることは授業における読み方に多くの

暗示を与えている。これらの言は「直ちに天才の心に触れよ」ということにおいて述べられているが、私はそれを「国学の回顧と教育」（大正四年）で述べられている「在るものの説明者ではなく、あらざるべからざるものの憧憬」において中心点としたいと思う。それは著者が、大正十二年の「編集余録」につけた解説にみられる現在での反省「わたしは大正期の青年として、自我の発見にすべてを打ちこみ、それを越えた社会の発見にまだ暗かった」につながるべきものであると思う。まだまだ、副教科書問題や川井訓導事件などに示された毅然たる教育的信念などふれたいことが多いが、不手際に紙数を超過してしまったので筆を擱く。以上忙忽の間に一知半解の妄言を連ねた。著者への非礼をおわびしたい。（信濃教育会出版部刊　A5四六一ページ　七〇〇円）

――二六年三月卒業・京華学園教諭――

×　×　×

駒尺　喜美　著
『芥川竜之介論』について

猪野　謙二

さき頃私は、相前後して三冊の芥川竜之介論の寄贈を受けた。進藤純孝氏の『芥川竜之介』、森本修氏の『芥川竜之介伝記論考』、そして駒尺喜美さんのこの『芥川竜之介論』である。いずれも、多年にわたる努力のあとが感じられる文字通りの力篇でその意味でも深い尊敬を覚えずにはいられないものだった。しかもこの三冊の本はそれぞれ充分に、こんにちにおけるその出現の意味をもっている。ことにそれらがはからずも、最近一般の近代作家研究のさまざまな傾向を代表しているようにみえるのも興味深い。

森本氏の伝記研究は、系図や過去帳、家の見取図や縁談契約書に至るまでのあらゆる資料を博捜して、ほとんどトリヴィアルに過ぎるといいたいほど、綿密に調べあげたものである。そしてとにかく、その考証的研究の一面だけに限っていえば、たしかにかつての吉田精一氏による伝記以上の詳しさということができよう。また進藤氏の大著は、芥川の「神化」もしくは「俗化」を排するため、あくまでも作品それ自体の遂次的な解明を通じて、曲折ある彼の生の条件を追求した力作である。しかしたとえば、あの「芸術的自殺」は「人間性不信の――レアリズムをもつてしては遂にとらへ得ぬ、人間のアフリカの結晶であつた」「それは人間性確信の文学から、人間性不信の文学への道を、身をもつて指してゐた。言ふなれば、芥川の死は、アンチ・ロマンの暁鐘をかき鳴らしてゐたのである」という終章の言葉などがいいあらわすように、ここにはかなり強引に、芥川を現代の文壇批評家たる進藤氏自身の問題意識に引きつけているところがある。その意味では、芥川の文学を「比喩の文学」としてとらえた福田恒存氏の著名な作家論などを、さらに現代的におし進めたものともいえよう。

これに対して駒尺さんの芥川論は、「自分の個展」をもちたくて、というその「あとがき」の謙辞にふさわしく、おそらくははるか